

淨土

1976-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一週一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十一年十一月二十五日印刷 昭和五十一年十二月一日発行
第四十二卷 第十二号



S.K.

「言温而氣蘇」

—言葉を大切に—

宮 原 祐 晃

(長野県下伊那光寺住職)

経済の高度成長と裏腹に精神面の低下は心ある者誰しもが嘆いて来たわけであるが、とりわけ自らの意志を表現する所の言語については、文法上の誤りはもとより、長幼の序、互譲の精神の現われ、慈愛あふるる言葉使用の欠乏等、益々薄れて来ている。

公害という言葉も余りにも乱用されすぎる。私達山間僻地に於て、工場誘致も当初は経済樹立のために、現今は過疎対策の一端として取りあげているが、凡てその結果から割り出して公害の有無により立ち消えとなり、切角の対策も空しく過疎は愈々はげしく、一方過密は益々その度を加えていることだらう。私の保育園でも老朽園舎の建てかえて目下鉄骨溶接の響きから、防水加工のための強烈なコールドの悪臭からなかなか厭々しいが、皆公害だ公害だとニガイ顔をする。僅々半年後には幼児の樂園となるものを、と思っているが……。

言温而氣蘇

正徳心委堂



十二月号



目次

ほろびの光——伊藤左千夫の歌の世界……………	藤吉慈海……………(2)
ある日ドイツで……………	江島惠教……………(6)
成道会と仏名会……………	佐藤成順……………(10)
△師走便り▽ヨーロッパの年末風物誌……………	福嶋瑞江……………(14)
お経のページ……………	スッタニパータ……………(19)
南無阿弥陀仏の意味——宗教と哲学……………	河野喜雄……………(20)
浄土教の流れ△十二▽三つの譬え……………	竹中信常……………(28)
◇仏教一ロメモ◇ 苦について……………	……………(33)
法数術語十二カ月(十二月の巻)……………	宝田正道……………(34)
念仏ひじり三国志(三十二) 法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………(37)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部



ほろびの光

伊藤左千夫の歌の世界

藤吉慈海

(花園大学教授
浄土宗学研究所主任)

伊藤左千夫の歌に「ほろびの光」一連の歌がある。私はこの歌に接したとき、仏教のいう寂滅とか涅槃というようなイメージが頭に浮び、左千夫の歌境の深さにおどろいた。その歌というのは次のようなものである。

ほろびの光

おりたちて今朝の寒さに驚きぬ

露しとしと柿の落葉深く

鶏頭のやや立ち乱れ今朝や

露のつめたきまでに園さびにけり

秋草のしどろが端にもものしく

生きを榮ゆるつはぶぎの花

鶏頭の紅ふりて来し秋の末や

われ四十九の年ゆかんとす

今朝の朝の露ひやびやと秋草や

すべてか幽けき寂滅の光

これらの歌は、左千夫が浄土教の信仰にふれ、仏教的境涯も深まった頃のものと思われる。

晩秋から初冬にかけての日本の風景はよい。

春の花も、夏の夜の月も、それぞれのよさはあるが、そしてまた秋の紅葉の美しさもさることながら、冬枯れた庭先の風景の中に、本

当の日本の美の極まりがあるようにすら思われる。それにしても、この「ほろびの光」一

連の歌は、左千夫四十九歳の時の作と思うと、若くしてこのような心境に到達した彼の偉大さに驚ろかされる。

「あららぎ」の斎藤茂吉は、この一連の歌に対して、こう言っている。

「晩年庭前の小景を歌ったものに過ぎぬ如くであるが、深い寂寥と悲哀とが沁み透るように読者の心に伝はって来る歌である。自然も人生も、個人も集団も一如になっ
てしまつて、言語に絶したというやうな深いものが、この小形式の言語芸術によつて表現せられていゝというのは寔に不思議なほどである」

私などにも、その説明がわかるやうな気がする。左千夫は、歌論の中で、万葉集の歌は、ゆつくり読まねば妙味がわからないと言つてゐるらしいが、歌も念仏もゆつくり味わつてみねばならぬやうに思う。この「ほろびの光」五首の歌も、ゆつくり読んでみると、晩秋、初冬の情趣がよくあらわれていて私は好きで

ある。そして、そこには四十九歳の若さがやっぱり出ていて、「ほろびの光」と言いながら、どこか能衣装を見るやうなかくされた錦みたいなものが感じられる。

浄土教のお念仏も、仏教の涅槃も、そのやうなものだと思われる。お念仏はゆつくり称えるべきものであつて、決して早くなつてはいかないやうに思う。心理的に木魚は合打ちにした方がよいということを聞いたが、合打ちのお念仏は本当に落ち着いてよい。しかし多くの人と一緒にお念仏を称える時は、調子がかかるので、つい合打ちをやめて打込みになつてしまつて、そうすると勢い早くなつてくる。お経を誦する時なども合打ちの木魚に合わせると、落ち着いていいものである。そのようなお念仏には強いいのちがひそんでいて、それがお念仏の声となつて出るのである。左千夫が、

秋草のしどろが端^{はし}にものものしく

生きを榮^{さか}ゆるつはぶきの花

と歌っているが、つはぶぎの黄色い花は、本当に強い命を晩秋の庭の隅に、ひっそりと、しかしはっきりとあらわしてくれるものである。お念仏などは、決して派手なものではない。ひとりひっそりと称えられるものであるが、それは命にみちたものでなければならぬ。「ものものしく」とはいかなくとも「生きを榮ゆるつはぶぎの花」のように、しっかりと色彩と強さがなくてはならぬように思う。

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ

露しとしと柿かきの落葉深く

この歌など、本当にお念仏申した人の心境がよく出ているように思う。お念仏を申してみると、不思議な心境が開けてくる。おりたちてというのは、「お念仏を申してみると」とおきかえられる。そこに実践があり行がある。お念仏申てしみると、今朝の寒さに驚くのだ、その実感、自己の罪業の深さに涙することもあり、心の浅間しさに泣くこともある。そしてまた、しつとりと露深い色づいた柿の落葉のような、念

仏の美しい心境になることもある。お念仏の美は能衣のうぎ装のうぎのようだというのは、そこである。けっしてけばけばしい絢爛けんらんさは無いが、いぶし銀のような幽玄な美がそこにひそんでいる。左千夫は、それを、

今朝の朝の露ひやびやと秋草さ

すべて幽かそけき寂滅はろびの光

と歌っているように思う。それは牽強附会であると人は言うでもあろう。たしかにこじつけであるかも知れぬが、私にはそのように思われるし、そのようなイメージが浮かぶし、連想されるから仕方がないのである。そして左千夫が、四十九歳でそのような宗教的境界に到達したことに、驚きと尊敬の念と、そして、すこしねたましくさ感ずるのである。お念仏というものが、自己の根源の命の声であると聞かされるにつけ、その根源の命とは一体何かと疑問に思うことがある。「唯心の浄土」、「己心の弥陀」という言葉があるが、浄土教というものも、その根源は、この真理

を離れたものではあるまい。わが内なる仏、わが心の内なる浄土、それはとりもなおさず、わが根源の命にほかならない。南無阿弥陀仏という声は、その根源の命の叫びであり、その命に通ずる声でもある。

坐禅をしていても、最後まで意識されるのは、自己の吐く息であり、呼吸だけははっきりと意識される。これをやめるわけにはいかない。ヨーガの修行などでは、この呼吸をちよつととめて、無意識の状態になることを訓練するようだが、生理的に呼吸を永く止めることはできない。まして自己の根源の命は一瞬もはなれられない。それこそが仏性であり、これこそが自己の宗教的主体性であるから、これがしっかりと自覚されないと、念仏の行者も、ふらふらしてたよりない。お念仏がそのような宗教的主体性確立のための行であり、また、宗教的主体性そのものの叫びでもあるところに、念仏は王三昧と言われ、諸法の王と言われるゆえんがあるように思う。

「浅きは深きなり」と浄土教についてよく言われるが、まことに凡夫往生の道は卑近にして浅いように見えるが、実は、その単調な口称念仏によって自然に悟道に入る深い意味が含まれているのである。法然上人が禪勝房の問いに対して、

「念仏に倦^おき人は無量の宝を失うべき人なり。念仏にいきみある人は無辺の悟を開くべき人なり」〔十二問答〕

と申していられるのも、そのような深い意味のあることを教えられるものと思う。

念仏にいきみある人は、いつのまにか心境が開けて仏智をいただくことができるのである。しかし「念仏にいきみある」とはどういうことか、それは命にみちた念仏のことである。生き生きと生きを榮ゆる生氣にみちた念仏でなければならぬ。倦^おうい、だるそうな念仏ではなく、いそいそとたのしい生氣にみちたお念仏が教えられるようになりたいものである。南無阿弥陀仏

想

随

ある日ドイツで

江島 恵教

(法政大学講師・文博)



その禅僧は、降り立った駅のまえで偶然日本人学生に出会い、彼に案内されてタクシーで研究室に現れた。文字通り雲水姿である。あまり突然だったので私自身びっくりしたし、研究室のスタッフはまずその姿を見て驚きを隠しきれないようすであった。

これはドイツ中北部の小都市ゲッチンゲンでのことである。

居合せた研究室の助手や学生に師を紹介し、とりあえず私のアパートに案内した。師は道中まるで関を切った

ようにドイツの印象を語りはじめ、語りつづけた。その夜は、まだドイツに来て十日も経たない妻を煩わして日本料理らしきものを作らせ、それとも知らずワインをもって遊びにきた二人の日本人留学生も加わって、賑かなパーティーになった。一歳になったばかりの私の子供も何となく興奮気味であった。ドイツにきてお坊さんに会えて話ができるとは思わなかったというので、学生諸君も仏教のことを、もしかすると生れて初めて、話題にし、思いを遠く日本に馳せている風情でもある。

翌日はまずゲッチンゲン大学のインド学、仏教学研究
室主任ベッヘルト教授に会ってもらい、主に禅について
意見交換。師の直截的な質問は、文献資料に基づく仏教
研究を事とする教授にとって意表をつくものも多く、九
月中旬のひんやりした部屋で汗をふき通訳する私に、教
授は「これは君に対する質問だよ」と言われたことも再
三である。インド・セイロンが専門の学者としては当然
とはいえ、このことばは、仏教を外から研究している教
授が仏教そのものの中で生きている師から主体性を問わ
れたときの困惑を表わしている。和気霽々のうちにも火
花の散る大変な会見になってしまったものだ。

市内の案内、翌日の小遠足では、まだ少ない歴史知
識を総動員して説明しながら、中世の名残りとどめる
街を共に歩いた。古い教会に入ったときなど、牧師に向
って師が軽く合掌すると、牧師は目礼で応じた。車中で
街頭で、近寄って来る人々と気軽に語り、握手した。
この間、師は私から問われることもなく、修行生活のこ
と、旅に出る前に胃癌の手術をしたときのことなどを語
ってくれた。

四日目に師はハンブルグへ向うというので、ゲッチン

ゲンの駅まで送っていくことになった。出がけに荷物を
整理しているうちに、師は六カ国語併記の会話帳を失し
たことに気がついた。駅に降り立って私のアドレスを捜
すべく手帳を出し入れたときに落したもののらしいとい
う。駅にいつて問い合せることにして、バスに乗った。
坂上のアパートの二階から手を振る私の妻子に向って、
師は合掌された。「御世話になりました。」これに経文の
つぶやき声が続く。一瞬私は強い衝撃に見舞われた。

会話帳は出てこないまま、師は車中の人となって北へ
向った。今度は私も合掌してお送りした。ドイツからフ
ランス、イタリア、イスラエルと独り旅をする予定であ
る師にとって、その会話帳はなくてはならないものだっ
たはずだ。ハンブルグで入手できるかもしれないと言っ
てあげたのだが、保証はなかった。

アパートへの帰りしな、私は先の衝撃の意味をあれこ
れ考えてみたが、すぐに整理がつかかねるほど、いろい
ろな思いが私の心に浮かんでは消える。こういうときは
無理に考えようとするよりも、感動をそっとそのまま放
っておいた方がよい。

とにかく、その禅僧の訪問は私にとってひとつの事件

であつた。

○

ドイツに来てからまだ六カ月余りで、新しい研究に着手する準備を始めつつあつた。ドイツ探險隊が中央アジアから持ち出したサンスクリットの古写本断片を研究するというのが私の目的で、まず関係文献の整理、読みなおしが当面の仕事であり、古い書体に慣れるよう努めてもいた。クシャーナ王朝期の古いアビダルマ写本の断片を写真で入手し、それと格闘を開始しようとしていた。しかも、仏教研究の伝統はあるけれども、仏教的な文化、雰囲気のないドイツという土地においてである。こういう場合、写本の写真などは研究資料として、単なるモノとしての意味しかもたない。千数百年の年月を越えて、ほとんど偶然に残り、私の眼前にある。資料としては貴重このうえない。その断片は私に解説を要求し、つなぎ合せられるものならつなぎ合せてみると私に挑戦してくる。単なるモノとしては、随分と私を悩ませることを受けあいだ。その地味で骨の折れる作業に手をつけはじめたのである。

禪僧と語っているうちに、私は自らが仏教の文献、北インドか中央アジアの仏教者が筆写した写本を相手にしているという事実、ドイツに来てからこれを忘れ去っていたことに気がついた。その写本は、千数百年前に、仏教のなかに身を置いた人の手で書かれた。したがって、行間にはその仏教者の息吹きが残っているはずである。どのような思いをこめて彼が書写したことか。また、解脱を求めて、学解・行解を求めて、どれほど多くの人がこの写本を手にしたことか。この写本にはそういう人々の思い、願いがこめられている。写本の歴史は単にモノの歴史ではなく、同時により多く人々の歴史でもある。この当りまえのことを私は見落しがちになっていた。

あくまで仏教を自己のこととして主体的に語ることは、日本であればごく自然であり、別に異とするに足りない。仏教の研究を文献に即して対象的に進めていてもそういう主体的な仏教への係わりあいについてはいつも慎重に配慮する。日本にあつては、多くの研究者が、研究対象としての仏教（外から見た仏教）と行としての仏教そのもの（内から見た仏教）との間に、一種の緊張関係を保ちつつづけている。この緊張関係の処理方法は各人によ

ってまちまちだ。ところで欧米の研究者の場合には、これがない。行としての仏教が欠落し、仏教に主体的に係わることはむしろ積極的に排除されるからである。どちらが研究者としてより適切であるか、いちがいに断定はできない。

禅僧の質問のいくつかをベッヘルト教授はむしろ私への問いだとしたが、それは教授の客観的立場と師の主体的立場との相違を浮き立たせ、私にその選択を迫ったものと考えられる。私は一応教授に近い立場で問いを切りかえしながら、その一方では何ともわりきれない気持ちになってしまったものである。

要は写本に接する態度だけの問題でなく、基本的な研究態度そのものにまで及ぶ性質のものだった。そして師の出現は、私が日本という仏教文化の生きているところから来た研究者であることを、思い起させ、強い反省を強いたのである。

○

それからしばらくして、やはりヨーロッパで仏教の研究をした東京の友人から便りが届いた。仏教的な雰囲気

のないところでの研究はどうか、という私への問いに始まって、帰国後彼自身がどういう研究を進めているかが記されていた。ヨーロッパ滞在中に慣れてしまった客観的な研究態度に疑問を感じ、仏教的な生き方のなかに自らの研究を位置づけ、意義づけようと苦心しているという。たしか、その手紙は「合掌」で結ばれていたと記憶する。彼は帰国によって、私は禅僧の訪問を受けたことによって、同じような問題に出会ったらしい。仏教研究を志して以来ずっと角つき合せていた問題であるとはいえ、その深刻さを痛感するには、何かの契機が必要だったわけである。

○

二年後帰国したときその禅僧から丁重な手紙をいただいた。ゲッチンゲンでの思い出が書かれていた。しかし、しばらくして人づてに師の訃報に接した。旅行前に施術して治っていたはずの癌が再発したのが原因で他界されたという。師がドイツの古城近くで買物する写真を取り出して見てみると、中世ドイツの風景の中で雲水職はびたりと納まっていた。



成道会と仏名会

佐藤成順
（大正大学専任講師）

十二月八日は成道会です。今年ももう成道会や仏名会の時期になりました。この二つの行事の声を聞くと、寺院の中にも、歳末の実感がわき、なんとなくあわただしさを感じます。

成道会は、釈尊が仏道を完成した日です。仏教という、新しい宗教がこの世にはじめて現われた記念すべき日です。

釈尊は、マガダ国の太子として、いずれは王位を約束され、美しい御妃とのあいだには子供も生まれ、恵まれた生活を送っていました。このシツダルダ太子が、突然、地位を捨て、家族を離れて

出家求道の道を選びました。この釈尊の出家の動機は、仏教そのものの性格にも関連してくるので、それだけに、いろいろに推測されています。そうした学問的なことはともかくとして、やはり、なんととっても、釈尊がすぐれた宗教者としての資質をもっていて、一般の人とものの見方、感じかたが違った、ということもが大きな動機でしょう。

人間はみな苦悩をもっている。苦悩のない人生はすばらしいに違いない。人間が宿命として負っている苦悩をいかにして解決できるか。そして、

なにが世の中の真実なのか。この難問を解決しようと釈尊は努力しました。老も病も死はいつか訪れます。生きることに限りない意義と喜びがあります。病いと死がつねにつきまとい苦悩させられます。

人生の苦悩をつきつめてゆくと結局は生・老・病・死の四つの苦しみに集約されます。釈尊は、この人生の四つの大きな苦を解決するために出家して各地をめぐっていろいろな体験をされて答を得ました。解決したといっても、釈尊に老・病・死の現象が、もはや起らなくなった。というわけではないのです。人間である以上、そういう苦悩が起らないはずはありません。老や病や死を克服するというのは、そうした事実の必然性を直視して、真理を正しく認識することなのです。釈尊は、生・老・病・死という現象をつきつめて、その現象の根本にひそむものはすべて移りかわる。諸行無常、という道理、すなわち縁起の理法を発見したのです。縁起の理法の発見それが釈尊の

成道の内容です。そして、人間の苦悩を回避するのではなく、みずから積極的に、その縁起の法の中に生きることを強調しています。

釈尊の成道と切り離せないのは悪魔との対決です。釈尊は、六年間の厳しい修行を積んだ後に、菩提樹の下に坐して瞑想にふけります。そこに悪魔が現われて釈尊の成道を妨害します。その状景は釈尊の伝記を記した『普曜経』や『方广大莊嚴經』『仏本行集經』などのいわゆる本生經典に、經典によって多少の相違はありますが、くわしく、そして劇的に描かれています。

釈尊の成道を妨害しようとする悪魔は、女を使って釈尊を誘惑させようと企みます。悪魔の命を受けた女たちは、釈尊のまわりに来て、女の特権を利用して、微笑をたたえた眼を送ったり、衣の裳をかかえて近づいたり、色目をつかったり、いろいろ媚態をこらします。經典には三十二種の媚態をあげています。その上、甘い言葉をかけて、「初春のなごやかな暖い好い時節です。楽しみま

しょう。一たび盛年を棄てれば二再び楽しむことはできないのです。なんでさとりなぞねがうのですか。禪定を修して結局なんになるのですかと、誘いかけます。

けれども、釈尊は、この媚惑に少しも心を動かされず、わが道を進みます。

魔女を使つての妨害に失敗した悪魔は、今度はみずから利剣を抜いて、「速かにこの場を立ち去らなければ、汝を斬殺するぞ」とおどします。このおどしにもひるまず禪定を続けます。悪魔はどうしても釈尊の心を乱すことができずあきらめて退散します。このように魔を降して仏道を完成するのです。

菩提樹下の禪定は、永年の苦行の総仕上であり、最後の詰めともいふべきときです。さとりを目前にした最後の場面で、悪魔の誘惑におそわれるわけです。なにか一つの目的を達成しようとするとき、九分どおり完成した最後の詰め段階にいかん困難があるかを教えてくれます。

この降魔の物語りは、いかにもフィクションめいた話ですが、魔は人の心のなかにある煩惱を象徴しているのでしょう。煩惱を魔の姿に具現して、劇的に効果的に表現しているのではないでしょう。そして、こうした悪魔は、人の心の中に外に、いつの世にも、どこにも、つねに隙を窺っています。悪魔が心を乱して悪念を起すことを「魔が差す」といいます。この言葉は、なにかうっかりして失敗したとき、ちょっとした心のゆるみによる失敗、などの軽い意味に今日では使われていますが、それは、魔に対する意識が軽くなったためでしょうか。あまりにも魔が差すことの多い毎日です。釈尊は魔を厳しくはらいのけました。魔を降すことそれがすなわち成道なのです。



成道会が過ぎるとすぐに仏名会がまいります。仏名会は、一年間に自分の犯した罪を懺悔し、消滅するための法会で、『三千仏名経』の説にもとず

いて、三千の仏の名号を唱えて罪を懺悔します。

起原は随分古く、淳和天皇の天長三年（八二六）に宮中で修し、承和二年（八三五）から年中行事となったようです。その後各宗で盛んになり浄土宗では、本来の様式のように、三千の仏名を唱えずもっぱら阿弥陀仏の名号を唱えて礼拝します。

仏名会に読む「礼懺儀」の一節には、一人の人間には一日に八億四千の念があり、その念はすべて三惡道（地獄・餓鬼・畜生）の業であるといっています。すると一日に八億四千の三惡道の業が起ってくるようになります。一年間ではどれだけ罪障が積ることでしょうか。

年末には一年間のすすばらいといつて大掃除をする風習が今日でも残っています。しかし、いくら家のなかを掃除しても、またさらには机の抽出しのすみすみまで浄めてみても、一年間に積った心のなかの罪障の塵はそのままです。心の塵は目に見えないのでつい忘れがちなのです。「クリンな人」とかというのが今年の流行語の一つでし

たが、それも外形的な面より内面的なものを要求する傾向に向いています。仏名会は、心の大掃除をする絶好の機会です。年末の忙しくあわただしい一日に、ふと自己を顧みて、静かに仏を念ずるのも決して意義のないことではありません。そうしたおだやかな時を過すということに意味があるのです。心の底まであらう浄めて新しい年を迎えて新しい出発をしたいものです。

＝好評発売中＝

松濤弘道著

新刊『仏教的生き方とは？』

△浄土選書1▽

新書判 二六八頁 価四八〇円

発行所 浄土宗 宗務庁

取扱 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

師走便り



ヨーロッパの年末風物誌

福嶋瑞江

ヨーロッパの冬は足早やにやってくる。私のいたフランス中部の都市トゥールでは、そんな印象が強かった。数々の楽しい思い出を残して夏のヴァカンスが終わると、やがて長い残照が黄葉を赭く染めて、人びとの心に反省と悔恨をせまるような時間を惜しげもなく与えてくれる九月が、秋というより冬を告げる季節として通過する。十月に入ればもう風は冷い。いつしか夜の明ける時間がぐんと遅くなり、私たちは灯火のもとで朝食をとるようになるのだ。冬ともなれば、うっすらと空がねずみ色に明けてくるのは、九時近くである。

フランス人が好んで飾るショールウインドの自然の風物も、色づいたプラタナスの葉から、小さき松葉ぼっくりに代わり、それに雪の結晶を形どった銀紙や、毛糸の花が飾られるころは、もう人びとの話題もノエル——フランスではクリスマスをこう呼ぶ——の休暇のことばかりである。

カトリックの伝統の強いこの国では、年末というのは、何よりもクリスマスを迎えることである。そしてその前後五日間位の休暇を、ふだん離れ離れになっている家族が再会したり、友人を招待したりして楽しく過すの

だ。日本と違つて正月三カ日を神事で迎え、松の内はトソ気分などという習慣は全くないし、正月も元日だけが休日で、二日からはもう平常通り働くことになる。だから、年の瀬というと、すべてが新年との切りかえのような、あの日本の気分った気分は少しも感じられない。そのかわり、街の中も、人びとの心もクリスマス、いやノエル一辺倒になるのだった。

なんといっても、ここでのハイライトは、街の中心に飾られるクリスマス・ツリーである。このトゥールには市庁舎の前にジャン・ジョレス広場と名付けられた、街の目抜き通りの交差する広場があつて、春から秋まではきれいな花壇で飾られているのだが、その植込みの大きなヒマラヤ杉に、色分けされた豆電球のリボンが、幾本もかけられ、見事なツリーに早変わりする。その光のリボンは向いのビルにまで渡され、下からの照明が、日暮れの早い夕闇の中にツリーの全体像をくっきりと浮び上らせている。傍らの噴水の水が明かりに映えて、燃えるように幾色にも色を変えて吹き上げる。そして、光のリボンを渡されたビルのフランス・ガス・電気会社のネオンの文字がひととき鮮かに読みとれる。この豪華なツリーに讃嘆の声を上げながらも、「ああ、やっぱりフランスなんだ」という思いが、このネオンの文字から、実感として強く私の胸に迫ってくるのだった。

街のデパートの前には、日本と同じようにサンタ・クロースが愛嬌を振りまいてはいても、歳末大売出しとかクリスマス・セールといった光景は見られない。ふだんよりは幾分人出が多くて、贈物でも買うのか家族連れが目立つくらいである。ただ目抜き通りを始め、そここの少し大きな通りで、何やらしきりと電気工事をしているのを見かけたが、このときは別に気にもとめなかった。それより驚いたのは兎や雉・野鴨のような野鳥が——フランスではこれらを総称して獲物^{ニジビエ}と呼ぶのだ——いっぱい出廻っていることだ。この国では兎は兎馳走である。香りのある葉を食べているから肉の匂いもいいし、高価である。市場にゆけば、いつでも片身になってぶら下っている。足のところにちょびりと白い毛皮を残したりして。ところが、目のまえに、まるのままの毛皮を着てぐったり伸びている兎、美しい羽毛の色そのままの鳥たち、こういった狩の獲物が、それも歩道にぶど

う酒の樽を置き、その上になんとも無造作に投げ出されているではないか。正直いって、私は思わず息を呑み、立ちすくんでしまった。日本ならさしずめ新巻鮭が店頭の軒先からぶら下っている、あの光景にあたるのだろうか。それにしても、ここはやはり深い森と広い原野、打ち続くぶどう畑の国であり、狩猟民族の末裔たちの国なのだ。さらには、美食と美酒の国なのである。

○

さて二十四日の朝、つまりクリスマス・イブの朝になると、私の寄宿しているカトリックの女子寮に二十人ぐらゐの若い男女のグループがやってきた。休暇で寮生たちほうみな帰省してしまい、ほとんど無人に近い寮の玄関から遊戯室、食堂が、その人たちの手でせっせと飾りつけられ、閑散としていた寮の一階は、たちまち華やいだ雰囲気になってゆく。聞くところによると、今夜、このトゥールでたった一人でクリスマスを迎える老人たちを、ここに招待するのだそうだ。八時頃車で迎えにゆき、歌や余興で孤独の老人を慰め、やがて集會室にしつらえられた祭壇で真夜中のミサがたてられる。そのあと軽い食事が出て、また彼らを車で送ってゆく。いってしまえばこれだけのことだが、若ものたちの温い善意は独り暮らしの老人たちの心に、どれほど大きな喜びをもたらすことだろう。毎年欠かさず、この青年グループが奉仕の活動を続けているという。生きていくということは、自分のためばかりではない、自分以外の他の大勢の人びとのためでもあるのだ。彼らはこのヨーロッパの共生の精神を脈々と受けつぎ、実行しているのだった。いまもって、犠牲と奉仕はつねに一体なのである。

ところで、私のような外国からの留学生は、どういう風にこの夜を過すのか。二、三人で南の方へ旅行に出るものもあれば、別の都市にいる友人を訪ねてゆくものもある。しかし、大方はフランス人の家庭に招待されて、その家族の中で楽しく過すようである。私も同じ寮にいた医学部の女子学生の家に招かれていた。彼女の家はパリ郊外のシャトゥにあるのだが、今年は田舎の別荘でクリスマスをするのだそうだ。そこはソーロニユ地方とい

って、このトゥールから北へ、つまりパリの方へ車で一時間半ばかりのところである。夕方、彼女の両親とお兄さんが車で迎えにきてくれる。皆で買物などしてから、私たちが街を出たのは、六時ごろだったろうか。もう、とつぷりと日の暮れた街を抜けながら、私は、はっと思い当たった。大きな通りには、どこも歩道と歩道を結んでアーチ形に星が飛んでいる。星々が輝いているではないか。その星々の下をくぐり抜けるように車は走ってゆく。あの電気工事はこのためだったのだ。それはトゥールだけに限らず、私たちが途中通り抜けた小さな町々にも、またあのブロー城のあるブロー市でも、その通り通りには幾重にも星が流れていた。それも、それぞれ異なったデザインで統一されて、小さな星と大きな星と、それに流れのように線がそえられていたりする。無駄な他の照明は一切消えて、この星たちだけが、清夜を祝福している。単純でいて、しかも最高にロマンチックな、心憎いまでの人工の巧み。これこそ、まさにフランスのノエルだ。

そして、トゥールを離れるところから街路樹が白く光って見えていたのだが、いよいよソーローニュの森へ入るころには、この現象ははっきりしてきた。樹氷だった。森の樹々も道路も、時たま人家の前に停めてある車の屋根も、まるで雪が降ったのかと錯覚するように白い。車のライトを浴びて、それが銀白色に輝いている。夕方からの霧が、見事に氷結して一切のものを白く蔽ったのだ。これはこの地方でも珍しいことで、八年ぶりの景色だという。それにしても、こんな平地で、こんな見事な樹氷が見られるとは！ これもまた、まさしくノエルに応わしい自然の景観だった。

○

こうして、フランス人の家庭で、はじめての休暇を送った私は、いろいろとまどいながらも、大いに見聞をひろめ、一週間後には、この友人のバリ郊外の家から、一人帰途についた。折しも暮れの三十日である。日本なら、街には門松が立ち並び、人びとの往来も一段と気ぜわしく、賑わうのに、たまたま地下鉄の乗り換えで、エ

トワール広場に出てみると、シャンゼリゼの大通りには全く人影がない。ただ凱旋門の偉容だけが、寒々と立っている。それを見上げると、その上には灰色の空が拡がり、あの夏の太陽の輝きは求めるべくもない。思い切つて、シャンゼリゼの通りを一駅歩いて見たが、どこも商店はみなしっかりと閉められ、特別の飾りつけもなく、歩道には枯れ切った落葉と、白く濁ったビニールが一枚風に踊ってはためいている。あと二日で元日だというのに、ここでは、もう月日も時間も、人間の生活とは無縁になっているかのようにだった。普段は優雅な商店街とその賑いで世界に名を馳せるこの通りも、この日は索漠として、一人の外国人に異国にいる思いを募らせるばかりだった。しかし、うら淋しいなどという感傷にひたるまえに、私は用心深くなっていた。それほどに街はひっそりと、冬空の下に沈んでいるのである。

帰りは汽車で、トゥールへ着いたのは七時近かつたろうか。やはり住み馴れた町のたたずまいは、懐しい。だが、市庁舎前の広場には、もうあの明るい光の輝きはなかった。クリスマス・ツリーも、光のリボンも取り除かれ、例のフランス・ガス・電気会社のネオンだけがいつもの通りに光っていた。休暇は終わったのだ。

それなら、フランス人はこのまま何んの感慨もなく、新年を迎えるのだろうか。さにあらず、日本とは逆に、クリスマスは静粛に、大晦日は大いに賑やかに騒ぐのである。幸いに私は市内のフランス人の家で、年越しをするチャンスをもった。主人は停年退職し、年金で余生を送っているこの家には、二人の妹さんの先客があった。マダムの手料理で九時近くから、ローソクの炎のゆれる食卓で、ゆっくりと夜の食事が始まる。旅行中の次男も帰ってきて、大いに談論風発、赤・白のぶどう酒が、ボンボンと抜かれる。食後はピアノを弾いたり、ダンスを楽しむながら十二時のくるのを待っている。電灯にはギイと呼ぶ宿り木の枝が飾られ、十二時を合図に、この下でなら誰とでも頬にキスができるのだ。やがて十二時、「新年おめでとう！」一せいに笑いのどよめきが起った。除夜の鐘は鳴らない。しかし和気霽々たる喜びの渦で、この国の年が明けた。

「スッタ」とは「たていと」「経」の意味であり、「ニパータ」とは「集成」「集録」の意味であるから、『スッタニパータ』は「釈尊の説かれた教えを集めたもの」ということになる。

この経は、今世紀初頭、西欧の学者によって紹介されるまで、わが国においては、あまり注目されることがなかった。しかし、この経は『法句経』同様、仏教の多数ある

現形のようにまとめられたとされる。

この経には、後代の仏教経典に見られるような煩瑣な議論はなく、日常的表現や具体的譬喩によつて平易なたちで釈尊の教えが説かれている。そして、その内容も特に難しいことを述べているのではない。

仏教が、そして当時のインドの修業者が求めた、永遠の寂静の世界（涅槃）に到るためには、ものごとに執着するな、愛欲・

(お) (経) (の) (べ) (い) (じ)

スッタニパータ

經典の中で、最も古いものの一つであり、人間釈尊の言行に比較的近いかたちで接することのできるきわめて適した經典の一つである。

この経は、詩で書かれた部分と散文で書かれた部分との二つの部分からなっているが、学者の推定によれば、詩の部分はアシカ王以前の西紀前二六八年前に、散文の部分は西紀前二五〇—一五〇年頃には

ほ煩悩を離れよ、誤った見解に惑わされるな、常に善への努力を怠るな、といった意味のことが多く語られる。そして、この内容からは、いまだ大規模な僧院生活は認められず、尼僧についての言及もなく、最初の仏教のすがたを見ることができた。また、当時のインドには「これが真理である」と説く師や修行者の多かつたことがうかがわれる。

また、一般の生活に対する言及も多い。

「みずからは豊かに暮しているのに、年老いて衰えた母や父を養わない人がいる。これは破滅の門である」(九八)、「他人の家に往つては美食をもてなされながら、客として来た時には、返礼してもてなさない人、かれは賤しい人であると知れ」(二二八)など、我々の耳に痛い言葉が多い。また、幸せについて、「父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、これがこよなき幸せである」(二六二)、「尊敬と謙遜と満足と感謝(適当な)時に教えを聞くこと、これがこよなき幸せである」(二六五)などと説く。「証人として尋ねられたときに、自分のため、他人のため、また財のために、虚偽の申立をする人、かれは賤しい人であると知れ」(二二三)などは誰かに聞かせたい言葉である。

岩波文庫から中村元訳『ブッダのことば——スッタニパータ——』が出版されていて、容易に安く手に入れることができるので、一読されることをお勧めしたい。(丁)



「南無阿弥陀仏」の意味

— 宗教と哲学 —

河野喜雄

(文芸評論家)

はじめに

誰でも知っているように、法然上人は、人間に誰でも例えばそれが人殺しの大悪人であったとしても、「南無阿弥陀仏」と御称名（阿弥陀さまのお名前を唱えること）をしていさえすれば、必ずや救われて、極楽往生が出来、つまり浄土へ行ける——ということを、始めて説いたお方である。

「浄土宗」という名前は、そこから附けられたわけであるが、高遠な仏教の法理の、七むづかしいことは何にも言わずに、ただ「南無阿弥陀仏」とお唱えしさえすれ

ば、人間は誰でも救われて、浄土へ行ける——ということとは、一体、どういうことなのであろうか。

上人は、万巻のお経を読破して、お釈迦さまの仏教哲学の深奥・秘蘊に味到せられたお方である。

そのお方の最終的な結論が「南無阿弥陀仏」の御称名なのであるから、お釈迦さまの説いたところの仏教哲学の高遠な根本原理と、この「南無阿弥陀仏」とは、必ずや、一脈相通するものがなければならぬ。私なりに、それを一応探究してみたいと思う。

一、機法深信

仏教を二つに分けると、聖道門と浄土門となる。前者は、その哲学的原理を追究し、自己修行を積んで、その自身の安心立命を自力で極む——という立場であって、これは相当程度のインテリでなければ出来ないことであるから、難行である。後者は、仏さまのお力にすがって、それで安心立命する——という立場であるから、これは誰でも出来ることで、易行であり、「易行浄土」ということが言われるわけである。

法然上人は、もちろん、その難行聖道を成就せられたお方であって、ご自身では、もちろん、安心立命せられるや、同時に阿弥陀さまの本願と全く同様に、すべての人間、つまり、人間誰でもが、安心立命出来ることを考えられた。

そしてそれは、上人の師である源信・恵心僧都もすでに「念仏」（ひたすらに仏さまを念すること）と言っておられるのであるが、法然上人は、それをもっと要約して、「口誦念仏」、つまり、阿弥陀さまのお名前をお唱えする——ということだけで、人間は誰でも救われ、安心立命が出来る、と発明せられたのである。すなわち、「易行浄土」である。そして、その念仏、口誦念仏の根本原理

として、「機法深信」ということがあった。

普通の漢和字典などにはこれは出ていないが、その「機」とは、人間は元来凡夫であり、悪人である。ということであり、「法」とは、他でもない仏法である。そして、この機と法とを、^{あたら}両方、深く信ずることによって、人間は誰でも救われる——というのが、「機法深信」の意味である。

この機ということ、人間は元来悪人である——ということ恵心僧都や法然上人は、人間は元来「罪深い」ものである、というような言い方をするとともに、クリストと全く同様に、極めて卑近な比喻をもってこれを説かれたので、当代の無智盲昧な一般庶民たちにも、よくその意味が判り、故にこそ浄土宗、またその姉妹宗であるところの一向宗が急速に庶民大衆の支持を得たのであった。

しかしながら、これを現代の国民大衆に、人間は元来悪人である、などと言ってみても、法然上人当代の庶民大衆とは、大分教養の程度も違うし、社会制度も大分整備されて来ている、人間があまり悪いことをしないで済むようになって来ているので、誰しも、容易には納得し

ないであらう。

しかしその「元来悪人」ということは、これを、人間の中の動物性を意味する、と言い換えたならば、誰しも首肯し得るのではなからうか。

人間は本来動物である。動物でありながら、他の動物たちを遠く超絶するところの、秀れた意識・精神を持っていて、それによって能く自身を律するとともに、ハッキリとその「共同社会」を意識しつつ、漸次にその共同社会の規律を作り、自分で自分の態度・行動を制御しつつ、いわゆる「文明」を作り出し、「社会的人間」として、一応、その本来の動物性を止揚しているのである。

故に、その社会的環境が一応の安定を保っている限り、人間は人間として生活し得て、その動物性の尻尾を出さずに済むわけである。

しかしながら、その社会的環境の一応の安定が、一たび、いささかでも破れ乱れて、そのバランスを失ったならば、人間の動物性は、否応なしに露呈せられる。

例えば、これを小にして、私たちが何らかの事情によって、一週間も十日も、飲まず食わずのような状態にいたたししよう。その揚句、何処かで飲物なり食物なりを見

つけたとしたならば、それが誰の物であらうとも、イキナリわが物にしようとするに違いなく、ケースによって、傷害・殺人などさえも辞さないであらう。事業の失敗とか、勤め先の解雇などによって素寒貧となり、誰も面倒を見てくれる者がいないような場合も、また然りである。これを大にして、戦争などの場合、人間の動物性がムキ出しに発揮せられるだろうことは、言うまでもあるまいし、現に、戦争でもないのに、最高学府の学生たちが、元来同系思想の同僚たちを、棍棒も鉄棒で平気に殴り殺しているのなどは、これを動物性の発露と言わずして、果たして何と言えようか。

すなわち、私たち人間は、本来、そういう動物性を内蔵しているのであって、何らかの契機さえあれば、それは否応なく露呈せられるのであり、その時、人間は悪人だとせられるのである。

そうすると、私たち人間が、社会的人間とし、共同社会の一員として、その人間性を維持して行くためには、私たちはつねに、自分が、動物とはその次元を異にするところの「人間」であることをハッキリと自覚しつつ、自身の内蔵するところの「動物性」を、可及的制御・止

揚することを考え、かつそれを居常実践して行かなければならない——ということになって来る。

故に、それだけのロジックの判る人だったならば、「機法深信」ではなく、ただ「機深信」だけでもよいわけであるが、一般大衆には、現代でもそれだけの人は、さして多くはないであろう。そこで「法深信」も必要であることになって来て、その「法深信」とともに、改めて「機深信」をその前提条件とするわけであり、その「機法深信」の大衆的具体化・易行化が、実に「南無阿弥陀仏」の御称名なのである。

「南無阿弥陀仏」と、阿弥陀さまのお名前をお唱えするときに、人間誰しも、悪いことをしようとは思わずまい。悪いことをしていながら、阿弥陀さまにお願いしようとも、そんなことが許される筈がないことは、どんな悪人でも知っていよう。

だから「南無阿弥陀仏」と御称名する瞬間だけは、私たちは誰でも「人間」であり、「善人」である筈である。

けれども、御称名している間だけは、その動物性・悪人性を一応止揚してはいるものの、元来、その動物性・

悪人性を内蔵している私たちは、御称名し終えた瞬間以降、何時、如何なる契機によって、その動物性・悪人性の尻尾を出すか、知れたものではない。

実にそこに「念仏百万遍」の必要を生ずる。御称名は百万遍、つまり、しょっちゅうお唱えしていなければならないのだ。

一日二十四時間、一四四〇分、八六四〇〇秒であり、一秒に一遍お唱えしても十万遍足らずであって、もちろん、睡眠中はお唱えは出来ないから、実際は五、六万遍になって了う。「百万遍」ということは、実にその二十倍位なのだから、つまり「しょっちゅう」ということになり、私たち、悪人性を内蔵する人間は、しょっちゅう「南無阿弥陀仏」と御称名することによって、始めてその「悪人性」を止揚して、人間として、安心立命出来る、というのである。

つまり、「機法深信」ということの一般大衆化が、「南無阿弥陀仏」であり、御称名、それも百万遍なのである。

大体、以上が法然上人の説かれたところなのであるが、実に面白いことに、上人よりも十世紀近い先輩であ

るところの、ユダヤのイエス・キリストが、そのイデーするところにおいて、全く同じことを言っているのである。

そのキリストの言葉を聞くのではないか。

二、すべての罪は許される 聖霊

を汚す罪のみは許されない

そのキリストは、新約聖書の中で、次のように言っている。

この故に汝らに告ぐ。汝らの犯すあらゆる罪も、信仰薄き言葉も許されん。されど聖霊を潰す言葉のみは許されじ。また人の子（キリスト）に言い逆らう者も、すべて許されん。されど、聖霊に対して言い逆らう者は、今生にても来生にても、永遠に許されじ。

（マタイ伝第二章、三十一、三十二）

すなわち、人間の犯す如何なる罰も、神に対する悪罵なども許されるが、ただ聖霊を潰す言葉だけは許されぬ。私にはいくら言い逆らっても構わぬが、聖霊に対し

て言い逆らう罪は、永遠に許されぬ——というのであって、言葉でさえ許されぬのであるから、それ以上の行為が許されぬことは、もとより言を俟たない。

そして、キリストは、別の場合において、この言葉と密接に関連するところの、次のような問答を、弟子のペテロとの間に交わしているのである。

ここに、ペテロ御許に來りて言う。「主よ。わが兄弟、我に対して罪を犯せしとき、幾度まで許すべきか。七度までは許すべきか。」とイエス答え給う。「七度とは言わじ。七度を七十倍まで許すべし」と。

（同上、第一八章、二一、二二）

このキリストの言葉の意味は、果たして如何に解すべきであろうか。

人間は、七〇〇度まで、罪を犯しても許されるのだと言う。四九〇度、つまり、昔風に人世五十年とすると、一年に十回ほど罪を犯しても許される、ということなのである。つまり、何度犯しても許されるということになる。

そして、それは人間というものは、それほど、何度でも罪を犯し、一生、犯し続けるものだ——ということをし

前提としてのみ、言い得ることであるのだから、これは裏返して言う、人間は元来悪人であり、動物性を内蔵している、何らかの契機さえあれば、罪を犯すことになる——ということであって、かの「機法深信」の前提であるところの「機深信」と、全く同一の理論的根拠に立脚する、と言えよう。

そして、等しく「機深信」に立脚するとすれば、クリストもまた法然上人と全く同様に、それを前提としての「法深信」という面を、何らかの形において説かなければ、いわゆる「迷える羊」であるところの一般大衆を救って、これを天国へ導くことは出来ない。では、クリストの場合、「法深信」に代るべきそれは何であったか。

他でもない、それはいわゆる懺悔・告白(Repentance or Confession)であり、その自身の犯した罪(悪行)を自覚・後悔して、聖霊の前にそれを告白することにより、その罪の再犯を自制・自戒することであった。

クリストの先行者、バプテスマのヨハネも、「汝ら、悔い改めよ。天国は近づけり」と言い、その悔改めのために、水でバプテスマ(洗礼)を施したのだったが、彼は、彼の後に来るべきクリストを予知しつつ、

されど、我より後に来る者は、我よりも力あり。我はその靴を取るにも足らず。彼は聖霊と火によりて、汝らにバプテスマを施さん。(マタイ伝、第三章)と言った。そしてその言葉の通りに、クリストが四十昼夜、曠野で悪魔の試み退けて、予言者として始めて民衆の前に現れた時彼の最初の言葉はヨハネと全く同様な、
汝ら悔い改めよ。天国は近づけり

(マタイ伝第四章、同題旨、マルコ伝第一章)

であった。そして、ヨハネは、民衆の悔改めのバプテスマに水を用いたのであったが、ヨハネの予言しているように、クリストは水の代りに、聖霊と火、就中、聖霊に依ったのであって、そのバプテスマに聖霊を必要とした、ということは、仏教における阿弥陀さまと全く同様に「聖霊」という在の絶対者を想定し、罪深き民衆たちが、その動物性の発露によって、罪を犯した度ごとに、その御前に膝まずいて、自身の悪行を告白するとともに、悔い改めて、その悪行を再びせざらんことを誓わせなければならなかったからである。

故に、もし在天のその聖霊自体が否定されたとする、罪深き民衆は永遠に救われることがなくなつて了う

むすび

わけで、仏教における阿弥陀さまと全く同様に、クリスト教においても、その絶対者としての聖霊は、必要不可欠であったのであって、その聖霊否定の端緒とも言うべき、それを冒瀆するような言葉さへが、絶対に許されなかったのである。

大体、右のように考えて来ると、七度を七十億もするほど罪深き、いわゆる「迷える羊」と「機」とは、哲学的には全く同一の根拠に立脚しているし、またそれを前提としての、聖霊の前での懺悔・告白ということと、「法深信」、「南無阿弥陀仏」の御称名を、しょっちゅう唱えることは、これまた全く同一の哲学的結論であった。と言うことが出来よう。

そして、実に他ならぬこのクリストの「懺悔」ということを、何と、法然上人の思想上の師である恵心僧都もまた言っているではないか。

もし罪を覆へせば、罪則ち増長す。発露懺悔すれば、罪則ち消滅す。
〔往生要集〕卷中、懺悔衆罪

東西の二大宗教における、民衆の安心立命の哲学的法理が、ここに期せずして、全く一致したことになるのである。

前に聖道門について、寸言しておいたように、人間性自身を論理的に分析しつつ、鋭意探求・難行して、自身で安心立命の域に到達できる人たちは、人間の中で最も秀れた人たちであって、それは彼らの自覚・自得した哲学的結論であったのだから、彼ら自身にとっては、別に絶対者としての神も仏も、また聖霊も必要ではなかったであろう。彼らがそういう事実を自覚している以上、彼らは最少限度に自戒・自律することが出来た筈であるからである。

しかしながら、彼らは、自身が安心立命の域に到達するや否や、直ちにまた、自力では到底、そこまでは行かないところの、同胞大衆の安心立命を考えた。そして「機法深信」とか「懺悔」というようなことを、その手段として、そこに「宗教」というものの理論的根拠が確立せられたのである。

「宗教」自体の発生は、人類の歴史的登場とともに遠く古く、フロイトによると、それは原始人たちの、偉大なる原父殺戮と、その「事後服従」による「神」への祭

り上げによるとせられる。

原初、偉大なる原父があつて、一族に君臨し、同族の全女性、その中には自身の娘たちも多かつたのであるが——を妻妾として独占し、男子が生まれると、直ちに殺して了つた。が後には妻妾たちの懇願によって、殺戮に代えてその男根切除を行ない、（それがいわゆる「割礼」の形で後世に遺された）さらに老化すると、今度は「部落追放」をもつてこれに代えるようになった。

追放された兄弟たちは、その母や姉妹たちの陰微な強力によって成人したが、彼らは冬至の一日、すでに衰老した原父を襲つてこれを殺戮し、その偉大さにあやかるべく、これを吸血・食人し、その後において、それまで彼らに厳禁されていたところの同族の女性たちと、^{まじり}擅に性交した。けれど、人間には感情の両極性 *Ambivalence* があつて、彼らは偉大なる父親に対して、尊敬と愛情とを有していたけれども、その反面において、それに劣らぬ反抗心と憎悪とを持っていた。そして、その後者の感情が登りつめた時点において、殺戮を敢行したのであり、その冬至の日を選んだのは、それは太陽の威力の最も劣える日であり、そしてその太陽は、とりも直

さず、父親の象徴であつたからである。

しかしながら、すでに原父殺戮を終えて了うと、その反抗・憎悪の一方感情は、その対象を失なつたために消散し、そのあとには他の一方感情、すなわち尊敬と愛情とだけが残存する。その残存感情によって、彼らは毎年冬至の日ごとに、父親殺しの再演劇を行い、吸血食肉の代りに、葡萄酒や動物肉を飲食するとともに、また性の大饗宴をも行なつたのであつて、それが「祭」の起源であり、この祭の繰返しに伴なつて、いわゆる「事後服従」によつて、原父は遂に「神」とせられたのである。

右がフロイト説は、これはもちろん仮説に過ぎないが、宗教の發生を説いて極めて首肯すべきものである。

釈迦の誕生は前六世紀（五六四）、クリストのそれはもちろん世紀初であるから、彼らの宗教の成立は、フロイトのいわゆる原始宗教の成立よりも遙かに後世のことに属するが、彼らが、ともに宗教の理論的根拠を確立していたことは疑いなく、それは、彼ら教祖自身にとつては、疑いもなく哲学であつたが、その成果を同胞大衆にまで及ぼさんとしたときに、そこに始めて、文化史的な意味における宗教が確立されたものであろう。



三つの譬え

浄土教の流れ

△十二▽

竹中 信常

(大正大学教授・文博)

法華經の中にあるたとえ話。

それは「三車火宅」のたとえ。

インドで昔、ひとりの富豪が所用をすませて自宅の門前まで来たら、おどろいたことに、家のまわりは火の海になっていた。さいわい四方の塀が高くて丈夫なので邸内で遊んでいた子供たちは火事に気がつかず、嬉々とし

てたわむれている。父である富豪は急に声をかけて子供たちをおどろかして怪我でもさせてはならぬと思い、門前に羊と鹿と牛とに牽かせた三台の美しい車をならべて、

「さあ、お前たち、この車に乗ってよそこに遊びに行きなさい」

と呼びかけた。子供たちはきれいな車をみると大喜びで

門外に走り出て、まわりの火事に気付かず、に車に乗って行ってしまった。

この時の子供たちはわたしは愚かな人間たちであり、富豪の父親というのは仏陀釈尊のことである。そして周囲の火の海はこの中に荒れ狂うさまさまの悪い出来ごと、よこしまな心、みにくい行為、そういったものである。わたしたちはこうした世の中の諸悪にとりかまされて、その日その日をうかうかとすごしてしまい、やがては世の荒波にのみ込まれて泡沫けしきのように消えてしまう。そのような状態にあっても、それに気がつかないものである。そうした無自覚のものを、無事に美しい車、つまり仏の教えに乗せて安穩な仏の国に導いて下さるのが仏さまなのである。

— 〇二〇 —

次のたとえばは譬喩經の中の一つ。

旅人がひろい荒野をたった一人で旅していると、突然うしろから気の狂った象が襲いかかって来た。びっくりした旅人は力の限り逃げ出したが、段々に追いつかれ

てアワヤと思ったとき、傍らに空井戸があったので藤蔓にすがって井戸の中に逃げ込んだ。井戸の中途にぶらさがった旅人はホッと一息ついて、ふと下を見ると、井戸の底に、恐ろしい毒竜が真赤な口から火を吐いて、旅人にとびかかろうと睨にらんでいるではないか。上を見ると、追って来た狂象が鼻息ささまびく待ちかまえている。上へも下へも身動き出来ず、進退きわまって、ただひたすらに藤蔓にすがっていたが、上の方をよくみると、すがりついている藤蔓の根もところどころに、白いネズミと黒いネズミとが代りばんこに出て来て、ガリガリと蔓を咬んでいる。命の綱は刻々細くなって、今にも切れそうである。旅人は生きた心持せず怖しさに震えていたが、そのとき、ポツンと顔に当たったものがあつた。何だろうとおおむいてみると、丁度、その口にまたポツンと落ちてきた。なめてみると甘い。井戸のふちからまったブドウの実がうれてその芳醇な果汁が旅人の口に、ボタン、ボタンとしたり落ちてくるのである。旅人は今までの死の恐怖を忘れ、ブドウの汁の甘味に魅了されてしまったのである。

たとえばなしの内容は以上のとおりである。旅人とは

いうまでもなくわたしは人間である。追いかけて来た狂象は日月の早さであり、無常である。毒竜は死を意味する。藤蔓の根もとをかじる白いネズミは昼、黒いネズミは夜で、日・夜、刻々といのちのちちまってゆくことをあらわしている。人間はこうして、いつなんどき絶えるかも知れぬいのちにながって、危険な状態の中で生きているのである。しかし人びとは、顔に当った甘いブドウの汁に死の恐怖を忘れた旅人のように、日々のくらしの中におこってくる五欲のとりことなつて、自分のいのちの危機、自分の人生の意義を忘れてしまふのである。ブドウの汁とは五欲（財欲、色欲、食欲、名欲、睡眠欲）のことである。

これら二つのたとえは、人間のこの世における生活がいかに危険に満ちたものであるか、しかもその危険に全然気がつかぬか、気がついてみてもすぐ欲望のとりことなつて、危険を忘れてしまふことを描いている。いってみれば、仏がわたしたちに向つて「お前たちはいまこんな状態にあるのだぞ」と教えているのだが、それならば、「どうしたらよいのか」ということは教えて下さらぬ

のである。

ところが最後まで親切丁寧に、どうしたらこのような危険な状態を抜け出して、安穩な生活、うるわしい国に行くことができるかを教えて下さる「はなし」がある。それは法然上人の信仰上の師であり、また教えの上での師であつた中国の善導大師が「観経疏」の中で語られたたとえばしである。

— 〇三〇 —

それは「二河白道」のたとえで、浄土宗の信者が仏の弟子となるための儀式「五重相伝」を受けるときに、実際におこなわれる物語である。その大要は以下の如くで、ここにも旅人が登場する。

旅人がひろい荒野を西に向つて旅していると、うしろから群賊やら猛獸惡獸が追いかけて来た。旅人は一所懸命に西に向つて逃げて行くと、目の前に、突然、河があらわれて旅人の行く手をさえぎつたのである。南の方は炎々と燃えさかる火の河、北の方は怒濤さかまく水の河。この二つの河は底なしであり、南北に際限なくひろ

がっているが、河幅は歩はばにして約百歩ほどである。

そして、よくみると火の河と水の河のさかい目に、幅四五寸、やっと片足がのるくらいの細い、白い道が一本、向う岸にまでつづいている。しかしその道には一方からおそろしい火炎が吹きつけ、他方からは荒々しい波が打ち上げてよほど落着いてよく見ないと分らぬほどである。

うしろからは悪人共が刃鎧をふりかざして追ってくる。猛獸共が爪牙をむいて近づいてくる。前には火と水の河が横わっている。白い道を渡ろうとしても細く、あぶなげで、今にも落ちそうで渡れそうにない。旅人は進むことも退くことも、横にそれることもできず、河岸に立止って動けなくなってしまう。まさに風前のともしび、危機一発というところである。

その時、旅人は思った。進めば水火の河に落ちて死ぬだろう。止まっていれば悪人猛獸に殺ろされてしまうだろう。どうしても死ぬのなら、この道を進んでみよう。

——そう決心して一歩、足を道の上に踏みおろそうとした、丁度その時である。旅人が佇んでいる東の岸のどこからともなく、さわやかな声が響いてきた。

「旅人よ、決心してその白い道を渡りなさい。かならず渡ることができるであろう。そのまま立止っていたなら、死んでしまうであろう」

旅人の決心をうながす、すすめのコトバである。その声に応ずるように、今度は、むこうの西の岸から、あたたかい、やさしい声が流れてきた。

「旅人よ、一心にここを定めて、その道を渡って来なさい。わたしが守って上げるから、火や水の河に決して落ちはしない」

この呼び声を聞くと旅人は、その声を信じ、その声をたよりに、心をおちつけて、一歩一歩、歩を運んで渡りかけると、東岸の賊どもが口々に、

「おーい、おーい、そんなにあぶない道を行くときつと落ちて死んでしまうぞ。それより、引き返えしてこい。命は助けてやる。そしておれたちの仲間にしてや

るぞ」

とさそいかけてきたのである。旅人はそんな声には耳をかさず、一心不乱に、ひたすら西の岸から聞えてきた導きの声をたよりに、白い道をすすんで、たちまちのうちに二河を渡り切って、西岸についたのである。西岸には旅人の身を案じていた心のやさしい人びとがあたたかくむかえてくれたのである。

このたとえのものと意味は次の如くである。東岸というのはわたしたちの住むこの世界のことである。そこには群賊・悪獸、つまりいろいろの悪いことがうず巻いていてわたしたちの日々の生活を脅かしている。水の河というのは欲望のはてしなく押し寄せること、火の河とは怒りと憎しみのほのおがすべてを焼き尽すことをたとえている。そのまんなかに通っている白い道というのは、わたしたち人間の心の奥にある。善いことを望み、求める清らかな心をいう。しかし、そのような心は、日常の欲望や悪事のために押しかくされて、自分でも、自分の心の中にそのようなきれいな心のあることに気がつかない。

い。丁度、白い道が細くて、火や水にかくされがちであると同じである。旅人が決心して、白い道を進もうとする、つまり自分の心の中にある真実を求めようとする清い心で世の中を生きてゆこうとするとき、東の岸から聞えて来た声は釈尊の教え、つまり人々を正しい道に進ませる教えである。これに應ずる西岸からの声は、理想の国を建設してわれわれの来るのを待っておいでになるアミダ仏の声である。仏の教えによって、自分の心の奥にある正しく清らかな心をもって世に処すれば、必らず安穩な理想の世界に到達することができるのである。しかし、世の中には誘惑が多い。東岸で「おーい、おーい」と呼び返えす悪党どもの声がこれである。このようなめさきのさそいなどには迷わずに、一心に仏を思い、仏を念じて生きて行く。これがわたしたち浄土門にあるものの生き方なのである。

このように、先の二つのたとえが「こんなあぶない状態にあるのだぞ」とだけ示しているのに対して、三つめの「二河白道のたとえ」はそのような危険な状態をどうしたらのがれることができるかを、はっきりと指し示して下さっているのである。

◇仏教一ロメモ◇

苦について

縁起(えんぎ)という言葉は、「縁起が悪
い」とか「縁起でもない」、「縁起もの」な
どと日常よく耳にすることが多い。

しかし、この言葉は仏陀の悟りの中核を
占める縁起の理法を指すもので、「これある
がゆえにかれあり、かれあるがゆえにこれ
あり。これなくばかれなく、かれなくばこ
れなし」という、あらゆる存在形態が相依
性のうえに成立していることを指摘する言
葉である。いわば右の「これある……」は
縁起の基本的な形を示したものである。

ここで我々が受ける「苦」について、右
の論法をあてはめると、「苦」にもこれを
成り立たせている要因があるはずである。
ちなみに仏教では苦を「四苦八苦」として
苦しみの種類を分けている。その八種とは

(一)生苦 (二)老苦 (三)病苦 (四)死苦 (五)愛
別離苦 (六)怨憎会苦 (七)求不得苦 (八)陰

盛苦のこと、前四苦は私たちが生存して

いるということ、それ自体につきまとうも
の。後の四苦の中、五陰盛苦は、人間の存
在を構成する物質的精神的あらゆる要素が
苦悩であると説いた、いわば苦の総括的説
明である。残りの(四)(七)のそれぞれはある
状況下に生ずる苦しみである。今、この三
つの苦に限定して、それらが成立して行く
過程をながめてみるわけであるが、それ
は、この苦を成立せしめるものは一体何で
あるう。それは誤まった考えや無知によっ
て引き起こされるものではないだろうか。

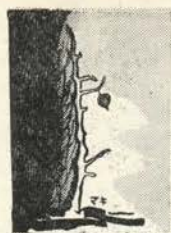
この誤まった考えや無知は「無明」という
言葉で表される。この無明もそれだけでは
苦には結びつかず、無明に依つて引き起
された行為が苦につながるのである。実
に私たちの苦しみは誤まった考えとそれ
に基づく行為によって作られるのである。こ
の誤まった考えや無知を克服すれば、私
たちは苦しみを受けずに済むか、と言うと、
そう簡単にはいかない。たとえば、「煙草
は身体に有害である」という正しい見解を
知っていても、禁煙できないという人は多

い、ということが物語っている。

ここで「行為」について分析してみる必
要がある。我々の行為は、ある種の刺激を
感受しそれに対して反応する、という構造
を持っている。つまり、刺激となる対象と
それらを感じる能力とから成る認識作
用、その刺激を感受したのち、自己にとつ
て望ましいように反応する作用の二つか
ら、行為は成立している。そこには「自己
にとつて望ましい方」という選択の場が含
まれているのである。人によってその選
択のバターンは異なるが、大体、本人にとつ
て楽となる方を選ぶのではないだろうか。

また、行為として完結した場合、それは行
為の余力とも言うべきものを残す。行為の
記憶とも言うべきものが残るのである。こ
の記憶は選択のバターンに取り入れられ、
その選択のバターンをより一層強固なもの
としてゆき、いわゆる習慣が生じて来る。
ここに正しい知識を得ただけでは苦を克
服できない困難さがあり、それにひくとえ
に選択のバターンと正していく地道な努力
が必要とされるのである。

(M)



法数術語十二ヵ月（十一月の巻）

たから
宝 田 正 道
だ まさ みち

十二因縁 じゅうに いんねん

生、老死に至るとする。これらそれぞれの滅がさとり
の要件となり、順逆に作用しあう。

十二光仏 じゅうに こうぶつ

十二有支、十二縁法・十二輪などともよばれる。人間の
生存の苦しみや悩みの原因をたずね、それを十二の縁起
の法則として説いたもの。過去・現在・未来の三世因果
の関係を説くとする解釈もある。すなわち、根本に無明
（無知）をおき、それが行（潜在的形成力）となり、識（認
識作用）となり、さらに名色（名と形、あるいは心と身体）
に分れ、六処（眼・耳・鼻・舌・身・意）、受（感受作用）と
次第して愛（盲目的行動）と取（妄執）となり、有（生存）、

阿弥陀仏の光明を十二種にわけて讃仰する場合の徳
号。『無量寿経』に説く、無量光仏・無辺光仏・無礙光
仏・無对光仏・徧王光仏・清浄光仏・歡喜光仏・智慧光
仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏の十二
称。これに寿命無量を讃えた無量寿仏をあわせて「阿弥
陀十三号」という。

十二処じふに しょ

十二入ともいう。主観的な六根と客観的な六境とをあわせて、対応させた関係。すなわち、眼に対して色や形、耳に対して音声、鼻に対して匂い、舌に対して味、身(皮膚)に対して触れられるもの、意に対して心に知られ思われるものである。

十二神将じふに しんしょう

薬師如来の眷属で、衆生を守護する十二人の夜叉大将。すなわち、宮毘羅・伐折羅・迷企羅・安底羅・頹伽羅・珊底羅・因陀羅・波夷羅・摩虎羅・真達羅・招杜羅・毘羯羅。また、全世界を守護する十二天の神々という解釈もある。すなわち、地・水・火・風・伊舍那・帝釈・閻摩・梵・毘沙門・羅刹・日・月のこと。

十二大願じふに だいがん

薬師如来が立てた十二の大きい誓願。すなわち、光明普照・随意成弁・施無尽物・安立大乘・具戒清浄・諸根具足・除病安楽・転女得仏・安立正見・苦惱解脱・飽食安楽・美衣満足の十二願。

十二天じふに てん

世間を守護する神々として、十二神将(↓)と同じ日月・火・風・地・水以下の諸天を数えたもの。

十二部経じふに ぶきょう

仏の教えを、仏典の叙述形式や内容によって十二に分類し、まとめた言い方。すなわち、修多羅(経)・祇夜(頌)・伽陀(偈)・尼陀那(因縁)・伊帝目多伽(本事)・闍多伽(本生)・阿浮達磨(未曾有)・阿波陀那(譬喻)・優婆提舍(論)・優陀那(自説)・毘仏略(方広)・和伽羅(授記)で、経により若干の異同がある。また、文・歌・記・頌・譬喻・本記・事解・生伝・広博・自然・道行・阿現とする場合(般泥洹経)もある。



以上、一月号から十二月号にわたって、法数術語の主なものを解説の形で連載し終った。永い間、拙い筆の跡をご清読いただき、お役に立ったかどうかは別として、読者の方々に厚く御礼申し上げる。

実は、「一」から「十二」までを冠した法数術語を毎月選ぶ方針として、一月号の冒頭でもお断りしたと思うがなるべく専門的な難語は避け、ごく一般的なもののか、浄土教に特に関係のあるもの、にしばった都合上、多ければ多いでセレクトに迷い、少なければ少ないなりにどうして頁を埋めようかと頭を痛めたことは事実である。「九」や「十一」「十二」のごときは、適当な術語が少なすぎて、「九は苦に通じる」などと冗談をとばしたほど困りぬいた。

それでも、どうやら「一」から「十二」まではなんとか工面して一応の術語を揃え、責任を果たしたつもりであるが、考えてみると、「十三」以降の法数は無限にある。法数術語としても、たとえば「十三観」「二十五菩薩」「四十八願」「百八煩惱」、あるいは「五十六億七千万年」

などというべらぼうな数を示すものに至るまで、解説しておきたいものはまだまだたくさんある。そこで、編集部のあるし、よい勉強の機会でもあるので、来年もしばらく、この続篇を書かせていただくつもりである。引き続きご愛読賜われればこれに過ぎる幸いはない。

『浄土』教化トラクト

『浄土宝暦』

B6判・表紙別 三十八ページ

定価一部四十八円(二百部以上四十五円)

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の
施本となります。どうぞ広くご利用下さい
ますよう宜しくご注文をお願い申し上げます。

発行 法然上人鑽仰会

念佛ひじり三國志

(三)



一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



義経の悲劇は、この構想が空中樓閣であって、平家の残党はすべて自分の首をねらっているのを、よく知悉していたことである。

文治元年（一一八五）十一月三日、義経は京都を去っている。辰の刻、午前八時で一行は行家、前中納言時実ら三百余騎だった。時実は、「平氏に非ざれば人に非ず」と揚言した平時忠の息子である。義経はその妹を愛人としていた。

ついでながら、当然斬首にあうべき平時忠が、死一等

九郎判官義経の都落ちは、哀れというか、いじらしいばかりの零落ぶりであった。

鎌倉にいる頼朝の怒り。そこからの逃避だけではなかった。西国に生き残る平家の残党を糾合させ、義経をその総大将におし据え、頼朝と拮抗させる後白河構想にまんまと乗せられたのである。

を滅ぜられ、おのれの領地である越中へ形ばかりの流罪となったのも、この女色政略に起因する。法皇の袖にすがりついた時忠は、娘を義経に献上することで助命の道を切りひらいた。この事実も頼朝をして義経の専横を怒らしめる罪状の一つになっている。

京都を去るにあたり、義経はいじらしいばかりの別辞を法皇の御所へ送った。

鎌倉ノ譴責ヲ遁レンタメニ、鎮西ニ零落ス。最後ニ参拜スベシトイヘドモ、行粧異体ノ間、スデニ以テ首途ス

(『吾妻鏡』)

法皇の策謀がこの都落ちの要因であることを知りつつも義経はなお臣下としての礼譲を保とうとつとめた。

一戸の家を焼くこともなく、一人の鎌倉方の間者を斬るでもなく。三百余騎の義経の手勢はひっそりと都大路を去ってゆく。

この別辞が法皇の御所へ届けられたころ、早くも使者は近江にまで迫った義経追討の総司令北条時宗のもとへ走っている。

前号のあらすじ

三位中将重衡の遺児・捨丸は遅ましく育っていた。遅ましきの中にも公達の血統をうかがわせる少年捨丸。生仏から依頼されたとはいえ、長楽寺の隆寛律師はわが門中に、この数奇な運命にもて遊ばれる少年を招き入れ、仏道修行に精進させようと思ひ。数日後、捨丸主従は東山の長楽寺を訪れた。

洛中では土佐坊昌俊による義経襲撃があり、頼朝と義経の不仲は決定的なものとなっていた。源家内部の混乱に乗じて平家の再興を企図する後白河法皇は、長楽寺に密使・藤原範家を送りつけた。範家は隆寛にずばり、重衡のわすれがたみ捨丸の話を切り出してきた。このような状況に身を置いた捨丸主従のまわりにも、また彼らの内部にも不穏な影が広がっていた。

一方、生仏はかねての約束通り、法然上人に隆寛をひき会わせたが、法然の自力修行否定の論理に憤然とする隆寛のもとに捨丸を置くことに不安を覚えていた。

使者がたずさえた密書の内容は、

九郎義経を洛中から追い払った。政情なお不安であるから、追討軍は一刻も早く入京して治安の維持につとめて欲しい。

そんな文章だったらしい。

つい数日前、白杵、戸次、松浦党に密使を派遣し、頼朝追討のお膳立てはととのった。院宣もここに用意して

＜都大路＞



ある。一刻も早く西下して軍をまとめよ、と義経を煽動した人とは全く裏腹な行動であった。

義経が去った二日あと、北条時政にひきいられた五万の源兵が都大路にあふれるのである。後白河法皇は、次々に使者を送って、頼朝追討の院宣は義経から脅迫されてこしらえたものだという弁明をくり返した。

そんな院宣を義経自身が信じていなかったことは別辞のなかにある「零落」という文字が実証しているであろう。

再起、巻き返しの旅ではない。ただ逃げ出したのである。

若い義経は、兄頼朝に抵抗することの無益さを誰よりも知りつくしており、同時に都に滞留中、いよいよ法皇側近の兄弟離間策にハマリこんだおのれの軽卒さを悔いる思いで一杯だったはずである。

北条時政が入京したその日、法皇は早くも新しい院宣を発した。

義経、行家らの一行を捕らえて召し出すべし、である。

この国では、後年長い期間にわたって「判官鼻負」と

いう感情が世をおいつくした。何も悪いことをしていないのに、零落の敗亡路へ追いやられた九郎義経への限りない同情である。

その同情は、都落ちのこの時点、すでに宮廷貴族たちの間で芽生えていた。九条兼実はその日記「玉葉」に書きつづる。

義経大功ヲ成シ、ソノ詮ナシトイエドモ、武勇ト仁義トニオイテハ、後代ノ佳名ヲ残スモノカ。歎美スベシ、歎美スベシ。タダシ頼朝ニ謀反ノ心ヲ起スコト、スデニコレ大逆罪ナリ。ココニヨリ天コノ災ヲ与フルカ。

武勇と仁義を、口をきわめて讃美している。頼朝への叛反心なじるが、前の文章の強調ぶりに比べれば遙かに弱い。文意を調整するためのつけ足しも取れる。

兼実としては法皇の策謀を知りつくしているはずだし、その畏に落ちこんだ義経に同情しつつも天下の叛反人としての大義名分を通さねばならぬ立場にあった。

武勇は当然だが、義経が在京中に立て通した「仁義」

こそ、彼自身を奈落の底へ突き落す凶器だったのである。九条兼実が後白河法皇の策謀を知悉していた事実は、その日記で頼朝が法皇をなじった文章をそのまま紹介したくだりが裏付けとなる。

頼朝数多ノ朝敵ヲ降伏シ、世務ヲ君ニ任セ奉ルノ忠、ナンゾ忽チニ反逆ニ変ズル。サシタル叡慮ニ非ズシテ院宣ヲ下サレンヤ。行家トイイ、義経トイイ召シ取ルノ間ハ諸国衰弊シ、人民滅亡センカ。ヨツテ日本第一ノ大天狗ハ、サラニ他ノモノニ求メザランカ。

つまり、今日は鎌倉頼朝を追討する院宣を発し、明日は義経、行家を討てと命ずる。これは大天狗のなせる仕わざだ。無思慮、無責任の行動である、と暗に後白河法皇を責めた頼朝の意志を（大藏卿殿御返事）そのまま「玉葉」は紹介するのである。

ただし兼実のこの露骨な法皇批判が、彼と頼朝との関係を密着させる政治的布石ともなった。

さて義経の一行が都を落ちていったころ、捨丸と馬粥

の主従も長楽寺を脱出し、西へ急いでいた。

行先はどこか。

摂津の四天王寺であった。

長楽寺隆寛に指示されたのである。隆寛もその着想は、院の御所からきた密使範家から発したものだった。

「そのように、うまくことが運ぶであらうか」

僧形の捨丸は、四天王寺の西門が見えはじめると、あらためて馬粥にささやいた。

「いずれ戦さを知らぬ長袖人が、額を集めて考え出したこと、所詮は図上の計画でござるよ」

馬粥はテンから範家の構想なぞ信じてはいないふうである。

「では、なぜ……」

少年は従者の顔を覗きこんだ。

範家の言葉に乗って、長楽寺を脱し、こんな摂津くだりにまでやってきたためか、と詰問したいのである。

「九郎判官の首なぞ、どうでもよろしいのだ。ここまで来れば、何かがあるかも知れぬと思ひましてな」

何かがある——

そうなのだ。流亡の主従はいま何かがある。という期

待に身をまかせねばならなかった。

「それと……」

と、馬粥は言葉をつなぐ。

法皇の側近、範家があの長楽寺に姿を現したという事実自体に、主従の身に危険が迫ったことを意味するのである。

三位中将重衡の遺児が長楽寺にひそんでいる。この事実をすでに知った策謀家たちは、おのれの保身を第一目的として、必ず何かを企らんでくるに違いない。その企らみには主従の死が、代償となつて付きまとうのである。この死の影を宿した長楽寺を脱しただけでも意味がある。と馬粥は主張したいようであった。

二

摂津難波の四天王寺。

遠く聖徳太子によって造立された国家的な仏寺である。

この造立は、仏法を忌避し、聖徳太子や蘇我馬子の手で滅ぼされた物部守屋の血であがなった寺だと伝えられ

る。没収された物部の領地に、彼の財宝が注ぎこまれた。労働力も奴隷の地位に追い落された物部軍の捕虜たちであった。

荒陵寺（あらはかでら）と当初呼ばれた理由も物部氏の荒廃に結末をつけるぐらいの意味をふくんだのである。

しかしこの四天王寺が国家的な仏寺に発展したのは、その立地条件による。

大陸から渡来した船は瀬戸内海を東上し、まずこの四天王寺を遠望する。波うちぎわに高々とそびえる堂塔伽藍が、大陸人に仏国土に、つぽんを強く印象づけるはずである。

いわばこの国の表玄関の粧おいであった。四天王寺を眺めつつ大物ノ浦（現在の尼崎）あたりに上陸した大陸人たちは陸路大和へと案内されてゆく、壮大美麗な印象は彼らに、つぽんが文化的にも大国であることを認識させる。その後の外交交渉が甚だ有利に展開する。と計算した時の政府によって四天王寺の外観はその都度、美麗になり、壮大になっていった。

ただし平安末期のこの時点、四天王寺のこうした表

玄関としての機能は失われつつあった。大陸の兵乱で唐船の来航は途だえていたし、復活した南宋との交流は専ら民間による商業交易であった。こけおごかしを必要としない、生々しい金銭雑貨のじか取引なのである。

ここに平家の膨張は、入港する場所もさらに西へ寄り、兵庫周辺がその中心に変貌していった。

難波の上町（うえのまち）丘陵にそびえる四天王寺は、この時点すでに難民の集合地にすらなっていた。ことに波うちぎわにつらなる西門付近には掘立て小屋が立ち並び、魚貝でその日をひさぐ流亡の民がうごめいていた。捨丸主従は、この西門の雑踏へまぎれこんでいった。

「庄四郎なる者はいないか」

馬弼はゆきかう難民をとらえては、たずねてみた。
みんな首を振る。

いささか恰好のついた漁船のかたわらで投げ網をつくろっている男に声をかけたとき、やっと反応した。

「瓦鳥の庄四郎のことか」

「瓦鳥か何か知らぬが、斎藤友実の家人だった男だ」

斎藤友実は源九郎義経の侍者である。屋島海戦以来、もっぱら義経の兵船集めを担当していた。壇ノ浦では彼

の集船能力が大いに役立った。

軍船を調達するために斎藤友実には内海沿岸の漁夫を配下にした。瓦島の庄四郎は、その有力者の一人だった。

今度の都落ち、九州の地へ義経が遁がれるために斎藤友実は一と足先にここ四天王寺西開の難民街へやってきたはずである。

瓦島の庄四郎は、主人とも言うべきこの斎藤友実を殺し、何喰わぬ顔で義経を迎え、馬粥の手で判官の首級をあげる、というのが範家がもたらした策謀の手だてであった。

義経の首級を抱いて、九州に至れば、そこにひそむ平家の残党は捨丸の麾下に糾合し、平家再興の軍事力が強大になるであろう。

虫の良い計算だったとも言える。

「瓦島の庄四郎なら昨夜、あの先で斬られたわい」と漁夫は答えた。

「斬られたのか。誰に？」

「人の噂では源家の勢だったそうなの」

「やっぱり」

馬粥は格別に落胆もしなかった。

公卿どもが構想した小賢かしい策謀が筋書どおりにゆくとは考えてもみなかったのである。相手は戦さにかけては天下第一の源九郎義経ではないか。

ことの経緯を馬粥たちはあとで知った。そうなのである。

たしかに庄四郎は、先乗りしてきた斎藤友実の一行を斬り殺した。軍船をととのえて義経の来着を待ち受けた。だが予定の日中には現れなかった。

夜陰、今夜の来着はあるまいと庄四郎らが寝こんだとき、いきなり数騎の武者が乱入して斬り殺してしまったのである。

すでに義経は庄四郎の背心を知っていたようである。摂津まできた義経は多忙だった。この庄四郎だけではなく、むかえ撃つ多田源氏の手の者と各所で戦わねばならなかった。

さすがに天下第一の戦上手義経だ。寡兵ながら縦横に兵を駆けめぐらし、随所で彼らを破った。

「船はどこへいった？」

馬粥は最後に訊いた。

昨日まで、この水ぎわにはおびただしい兵船が浮んで

いたのであらう。

「源家の武者が水子を今朝集めて漕ぎ出していった」

「どこへ」

「多分、大物ノ浦あたりであらう」

大物ノ浦。その尼崎港から義経は乗船し、西国さして漕ぎ出すはずである。いや、もうすでに出立したのかも知れない。

漁夫は浮かぬ顔で空を見上げた。

「これはいかぬ。疾風(はやて)がくる」

なま暖い風の匂いでも嗅ぐようにして鼻をうごめかす。そして舟のともずなを解き、どこかへ引いていった。

午後の青空には、帚で掃いた跡のような流絲状の白雲があった。どこから見ても台風の襲来を予兆する象状ではなかった。

「今夜はさしづめ西院の」

と、馬粥はみぎわから離れた。四天王寺の西門へ登っていった。

僧形の主従は漫然と西門を目ざしたのではなかった。

その僧房に訪ねたい念仏ひじりがいたのである。

三

信阿弥陀仏。

といった。

この人、元は天台僧で長樂寺にいた。阿証房印西上人の愛弟子であった。

何かの折に頼りとせよ。

と隆寛から言われてきたのだ。その何かの折が、早くも来た。今夜は泊めてもらわねばならない。

西門僧房は門外とそれほどの差がない。奥に巨大な観音像が安置してあるだけで、広い土間にはおびたらしい数の僧が坐りこみ、銘々勝手なことをしている。僧衣をつくろう者、身体から取ったシラミをつぶしている者……まさしく乞食坊主の集団であった。

「信阿弥陀仏のはどこか」

馬粥の声に、ひよろ長いひじりがのっそりと立ち上がった。此方へ歩いてくる。

馬粥たちは長樂寺における僧名を名乗った。

ご厄介になりたい、と申し出ると、信阿弥陀は、無精

<粥のたきだし>



髭の口もとをゆがめて笑った。

「厄介になるもならぬも、そこへ横になるだけでいい」と広い土間を指した。

西門一つを隔てただけで、こちらも難民の収容所もどきで、変っていない。

ただ巨大な屋根があることと、一日に一椀だけ粥を四天王寺側が供してくれるのだった。

「そうじゃ、もうじき粥時になる」

信阿弥陀は主従をおびたらしい椀を積み上げた厨房の前へ連れていった。

椀を持って行列するのである。

やがて四天王寺の喝食が二人、大鍋を運んできた。もう一人、主任らしい喝食が匙を握って馬粥たちの行列を眺めわたした。

いつのまにか彼らの背後には長い列が出来ていたのである。

主任は部下に命じて湯桶を持たせ、大匙で熱湯をすくって大鍋に入れ、掻きまぜている。

「あの人は眼が肥えていて、ひと眼で今日の人数を読んでしまう。定量が足りぬとみるやああして湯を混ぜて湯

をふやすのです。今日はあなた方お二人がふえましたからね」

信阿弥陀はトボケた口調で語る。

この僧房生活を楽しんでいるふうがある。

粥の実は菜の切れっ端だけだった。味も薄かった。

「肉がなつかしいのう」

馬粥は眼を細くして捨丸をかえりみた。生駒の馬肉の粥が思い出される。

「ところで、なぜこんなところで暮らしておられるのか」

信阿弥陀が長楽寺の豊かな生活を捨てて、こんな乞食暮らしを、なぜ始めたのか。

「なぜ、と言われても……」

とまどった表情になり、口をつぐんでしまう。此処へきた動機がはっきりと自分では掴めないらしい。

「あれは西洞院の小路であったか」

ひと組の哀れな母子と口をきいた。

さしづめ平家に関係のある母子だったのであろう。母は子を養うために春をひさいでいた。

信阿弥陀はあわれんだ彼女を、長楽寺の檀那である機

織の業者に世話してやった。そこで四カ月ばかり、母子は真面目に楽しく暮らしていた。

ところが、ある日、子供だけを置き去りにして母は逐電してしまったのである。

一四天王寺の西門下にいる。と聞いてな。探がしにきたのじゃ」

「なるほど」

「それきりじゃ」

「ここに住みついてしまわれたのか」

「さよう」

「それは、いつごろの話で」

「さあ一年半、いやかれこれ二年になるかのう」

「その女の行方はわかりましたか」

「いまだにわからない」

信阿弥陀は、そんな女よりもこの西門外にたむろしている流亡の難民たちに強く魅きつけられたのであろう。彼らの愚痴話を聞いてやったり、相談に乗ってやることに生がいを感ずはじめたのであろう。

長楽寺からは何度も迎えの者を出したが、信阿弥陀は頑として動かぬ、と隆寛も語っていた。

信阿弥陀の師僧は阿証房印西上人だ。

慈悲第一の阿証房。

と呼ばれた人だった。

その師僧に最もふさわしい弟子だったかも知れない。

「ところで近ごろ、しきりと阿弥陀を名乗るひじりを聞きますが、どういうことで」

「なあにそれはね、此処へ時々東大寺の重源上人が現れる。ちょっと話をしていると、あの人は、いきなりお前は阿弥陀だと独りきりしてしまふ。此方はどうでも良いと思つてゐる」

「長楽寺の隆寛律師もそう呼んでいましたぞ」

「重源という人は記憶力が飛び抜けておる。この次に来たとき、前に付けた名前をちゃんとおぼえていて。おう信阿弥陀か、と肩を叩かれる。これではおのずと信阿弥陀になってしまうではないか」

どういふ意図か知らぬが、俊乗房重源がゆき遇う私僧（ひじり）たちにやたらと阿弥陀号を付けたのは事実らしい。

慈円も愚管抄で、重源がやたらと阿弥陀号を付け散らし、念仏ひじりたちの結社をはかつてゐる様子をほのめ

かしてゐる。

それにしても、日本各地を飛び歩き、こうした乞食精舎とも言うべき四天王寺の西門僧房にまで現れてゐる重源のエネルギーは異常とも言うべきであらうか。

夜が深まる。

僧房のひじりたちは勝手気ままな姿で眠つてゐる。

僧衣だけの者は、そのまま手足をすくませて、深夜の冷えこみからわが身をかばう。物持ちの僧は紙帳で身をくるむ。草で編んだ褥をひつかぶる者、端座したまま眼を閉じてゐる者。さまざまである。

野育ちの馬粥や捨丸は、その点安気だった。床の上に大の字になつてイビキをかいてゐた。生駒の馬小屋に比べれば、この僧房は雨露の侵入してこない楽天地であつた。

馬粥は、それでも眼をさました。僧房をゆさぶる風足は凄まじすぎた。昼間漁夫が予知した疾風が、ほんとうにやってきたのだ。外壁は激しい雨脚で叩かれてゐる。

「ひどい夜になつた」

と、捨丸も起き上がつて呟いた。

「この吹き降りでは、西国へ向った九郎判官もひとたまりもないな」

「われらが首を掻かずとも、荒れた海が呑みこんでしまうわい」

主従の私語も荒れ狂う風雨の音にかき消されんばかりであった。

その刻限、大物ノ浦の九郎義経一行は難渋をきわめていた。

多田行綱の手勢がくり返し執拗に攻めかかるのが、むしろ幸いした。彼らと応戦しているうちに日が暮れてしまった。乗船の予定が遅延したのである。

やっと港へ来てみると、そこには荒波が渦巻き、昼間用意した兵船は一隻残らず吹き流されていた。水子の影もない。

ここは散り散りになって、しばらく潜伏するしか方法はあるまい、ということになった。

恰好なかくれ場所へご案内つかまつる。

と、武蔵坊弁慶は義経の身辺護衛を買って出た。随う者は伊豆有綱と堀景光、それと妾女の静だけであった。

みんな狩衣をかぶり、吹降りの道を、弁慶に先導され

て大物ノ浦の港から落ちていった。他の者、佐藤忠信とか伊勢義盛、片岡弘義ら義経股肱の臣たちも再会を約して、思い思いの退路へ消え去ってゆく。

武蔵坊弁慶が求めた恰好なかくれ場所とは何処であったか。

奇しくもそこは四天王寺西門の僧房であった。

まだ夜は明けきっていなかった。

義経らは僧房の外へたどりついた。何度か此処へ来たことがあるらしい武蔵坊弁慶は大戸を押し開けて、主人らを建物の内部へ招じ入れた。弁慶以外は僧形でない。しかしこんな曉け方のことだ。殆んどの者が眠っていた。眼をあげた者も咎め立てなぞしなかった。

主従五人は僧房の片隅に身を横たえた。しばしの仮眠へはいった。

夜半に眼ざめた馬粥だったが、再び熟睡をはじめていった。そんな新客の到着に気づくともしなかった。

(つづく)

『浄土』誌購読希望者をご紹介下さい。

法然上人讃仰会

二 編集後記 二

○月日の速さを痛感する。今年もまた極月十二月を迎えてしまった。うかうかと日を重ねて来てしまった後悔が、今、年の瀬のいたずらにあわただしい雰囲気の中で、どうしようもなくただよっている。たしかに、師の僧が忙しく走りまわるほどの月、「師走」であるが、この師走にはまたものごとの成し終えた状態、つまり、「為果（しはつ）」という意味もこめられている。振り返って、やり残したことの余りにも多かったこの一年の自分にただ慚愧するばかりである。

マラソンの駆け去り師走の心せかる

海道

極月の自転車を駆る妻に会ひ

青研

○都会の喧騒はもはや一年中を通して変わらないが、人々の心の様相までも落ち着きのないざわめきに追従している。あたかも年末の世間をわたる人々のうごめきは、現代

社会の実相を象徴しているかのようである。こうした折にこそ、私たちに求められるのは立ちどまって我が身を顧みる心の余裕である。冬の日には短い、その穏やかな日差しは暖かい。それは厳寒の凍てつく世界の中で、私たちに潤いを与えてやまない。かつて一茶が「かくれ家や村一番の冬日向」と詠み、また子規が「気楽さのまたや師走の草枕」と作句した情趣は、冬枯れの索寞としてしかも押しつまった年の暮に、ひととき安らいだ時間を心深くかみしめているのである。

○あわただしい師走の一日に、穏やかな時間を過すということはなかなかむずかしいことかもしれない。しかしそうした折にこそ、ゆとりのある時間を過そうとする心の余裕が、せわしない年の瀬の、人と人との心のつながりをやさしくするのである。十二月の年中行事の成道会や仏名会にあわせて、ひとときの念仏の生活をいたすのも決して意味のないことではあるまい。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十一年十一月二十五日印刷
昭和五十一年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

太正大学教授 安居香山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250頁 定価 850円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問題の書!!

——目次——

○ここにも大変革の予言がある○予言で定められた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

発売元 探究社

中佐ビル3F

(振替) 京都 21185

漢和对訳 『和訳浄土三部経』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・注解つき

『浄土宗^{檀信徒用}のおつとめ』

折本 68 頁 定価 190 円 (100部以上一割引)

折本 80 頁 〈小消息つき〉 定価 220 円 (100部以上一割引)

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振替 (東京) 8-82187